

大聖寺藩とは

大聖寺藩は石川県西部、福井県と接する現在の加賀市
辺りにあった、加賀藩の支藩です。
寛永十六年（一六三九）、加賀藩第三代前田利常が隠
居する際に、三男利治に七万石を分け与え、大聖寺藩が
誕生しました。
加賀百万石に対して大聖寺藩は小規模ではありますが、
明治維新まで存続し、九谷焼（陶磁）、山中塗（漆器）の
産地としても知られました。

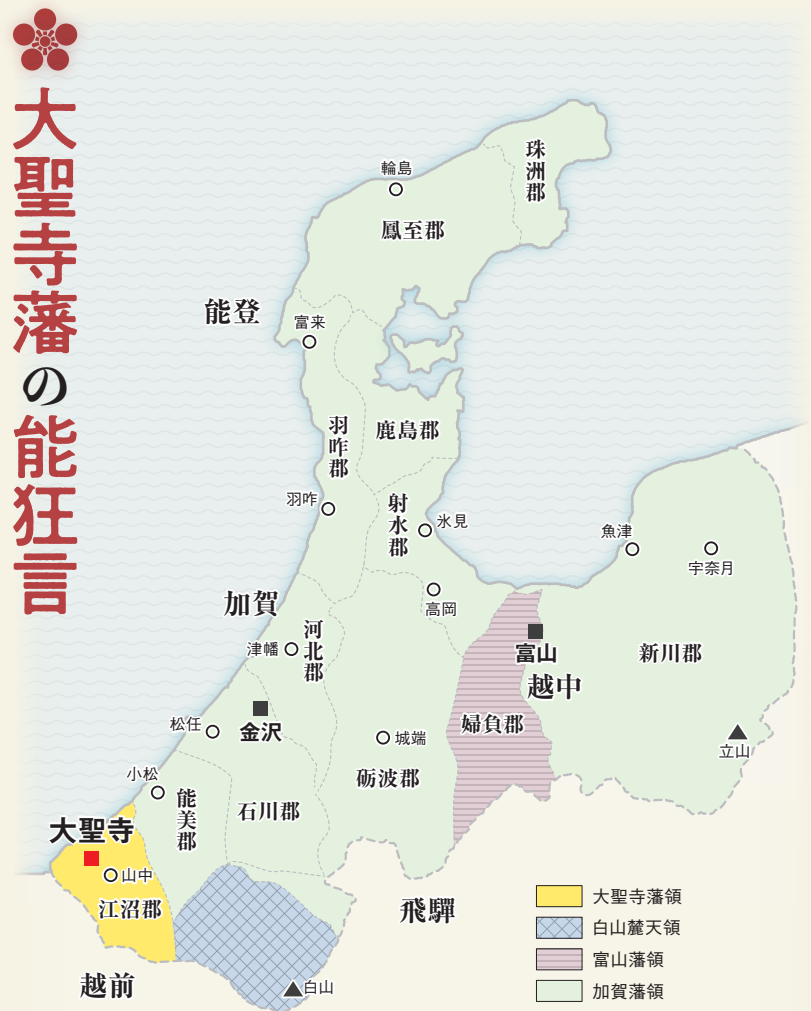


長流亭

大聖寺藩の能狂言

豊臣秀吉の熱狂的な能楽愛好は諸大名にも
広がり、江戸時代には武士の嗜みとなってい
ました。加賀藩も例外ではなく、初代藩主前
田利家が慶長三年（一五九八）に金春流猿楽
師（能楽師）の金春氏勝を招いて勧進能を行
なっています。その後、加賀藩では第五代藩
主綱紀のときに、將軍徳川綱吉の影響を受け
て宝生流を採用し、「加賀宝生」という言葉も
生まれました。

宝永六年（一七〇九）、大聖寺藩第三代藩
主前田利直が再建した藩邸には、休息所であ
る長流亭（重要文化財）を、敷地内にある江



大聖寺藩・加賀藩・富山藩領略図

（山口隆治「シリーズ藩物語 大聖寺藩」2020年、現代書館をもとに作成）

沼神社には能舞台を造営しました。
宝生流の謡を二百以上そらんじていたとい
うほど能に傾倒したのが大聖寺藩最後の藩主
利邨です。江戸幕府の崩壊で大名たちが召し
抱えていた猿楽師が演能の機会を失って能楽
界が混乱するなか、前田家と宝生流は断絶し
てしまいます。その後も利邨は観世流梅若家
の能舞台に出入りし、天覧能でシテ（主役）
をつとめました。

大聖寺藩は小さな藩ではあるものの、加賀
藩にならい、古くは金春流、のちに宝生流、観
世流と能楽が盛んでした。

大聖寺藩（石川県）

前田家伝来の能面

令和5年11月21日（火）
令和6年1月14日（日）
東京国立博物館 本館14室

本特集で紹介する文化庁所蔵の能狂言面は、平成
二十一年（二〇〇九）度に文化庁が購入した「鐘紡コ
レクション」の一部です。能面二三面、狂言面四三
面を数えるこのコレクションには能装束も含まれ、昭
和二十年代中頃に三井家から鐘紡に移りました。
そのなかの「能面泣増」には「前田子爵」と記した
札が付属します。前田子爵とは、加賀藩の支藩である
大聖寺藩（現在の石川県加賀市周辺）最
後の藩主で、能をよくした第十四代藩

主前田利邨の事です。三井家には大聖寺藩の能面、
能装束を預かっていたと記す記録もあり、このコレク
ションはもともと大聖寺藩前田家のものだったと考え
られます。
現在、加賀藩や、大聖寺藩と同じく加賀藩の支藩で
ある富山藩の能狂言面は流出し、全体像を把握するの
が困難です。大聖寺藩の面はまとめて残っていること
が貴重な大名家のコレクションです。



面裏



おおあくじょう

大悪尉

Noh Mask: Ōakujo

安土桃山～江戸時代・16～17世紀 文化庁

ほうしゅう ほんめん

宝生家本面の写しです。面裏の銘「丹後州／愛若

大夫 廿三枚之内」から、細川家お抱えの猿楽師

愛若大夫が所持していたことがわかります。前田

家と細川家との関係を物語るものといえるでしょ

う。

Thematic Exhibition

Noh Masks from the Collection of the Maeda Clan

This exhibition presents theatrical masks for Noh and *kyōgen* — Japanese traditional performing arts. They were owned by the Maeda, a samurai clan that ruled Daishōji Domain, a branch domain of Kaga Domain, in present-day Ishikawa Prefecture.

Many collections of Noh items that belonged to other samurai clans were dispersed over time. However, the Maeda collection has remained largely intact, which makes it extremely valuable. The collection comprises 123 Noh masks and 43 *kyōgen* masks, as well as Noh costumes. In this exhibition, visitors can also glimpse the links that the Maeda clan had with Kaga Domain and artistic schools that Kaga Domain patronized.



特集 大聖寺藩（石川県）前田家伝来の能面

令和5年（2023）11月21日発行

執筆：浅見龍介、川岸瀬里 撮影：浅見龍介、吉岡由哲 翻訳：君波妙子（以上、東京国立博物館） デザイン・制作・印刷：精興社
編集・発行：東京国立博物館 © 2023 東京国立博物館 Tokyo National Museum



能面 大癡見
Noh Mask: Ōbeshimi
「一透作／佐渡嶋／久知住」刻銘
室町時代・15～16世紀 文化庁



能面 小獅子
Noh Mask: Kojishi
南北朝時代・14世紀 文化庁



能面 節木増
Noh Mask: Fushikizō
「宝生大夫／良重（花押）」金字銘 江戸時代・18世紀 文化庁



節木増

宝生家の名物面「節木増」の写しです。鼻の付け根左側の脂のにじみや、面裏に節の穴といった特徴も写っています。「宝生大夫／良重（花押）」の銘があります。宝生家第九代大夫の良重（友春、一六五四～一七二八）は加賀藩主前田綱紀の能の指南役となり、次男嘉内は加賀藩の御用役者となりました。宝生家と前田家の交流を物語る面です。

南北朝・室町時代作の古面

江戸時代に誕生した大聖寺藩伝来の面のなかには、制作が中世に遡るものもあります。これらはいずれも造形的に優れています。

小獅子には、通常あるはずの牙がなく、黒漆の上に朱漆を塗っています。縦が十八・二センチと小さい点も、定型の小獅子とは異なる点といえます。

大癡見は、一文字に引き結んだ口の上下に力がこもった充実した造形が魅力で、頬などに非常に厚く木屎を盛って表現する点が特徴です。現存する大癡見のなかでも最優品といってよいものです。作者である一透は、喜多古能が記した『面目利書』では赤鶴のことでされています。赤鶴は世阿弥の『申楽談儀』に「近江には赤鶴、鬼の面の上手也」とある人物ですが、その正体は不明です。しかし、この大癡見を作った一透は、佐渡島に住むとあるので赤鶴とは別人でしょう。邯鄲男も通常と違って眉間に皺を刻まず、頬の肉の薄い上品な顔立ちです。

能面は江戸時代に入ると定型化します。その前の作ならではの、定型とは異なる造形が見られます。



能面 曲見
Noh Mask: Shakumi
「相伝之写／秦重氏（花押）」朱漆銘
江戸時代・17～18世紀 文化庁

曲見

多くの写しが作られた金春家伝来の曲見の写しです。面裏に「相伝之写／秦重氏（花押）」の銘があります。秦は聖徳太子に近侍した秦河勝を祖と仰ぐ金春家が用いる姓です。

名物面の写し

熱心に演能を続けてきた大聖寺藩には、各流派の名物面の写しも伝来しています。

当時、名物面の写しを作ることや所持することは流行でした。



能面 邯鄲男
Noh Mask: Kantan Otoki
「龍右衛門作／満昆（花押）」金字銘
室町時代・15～16世紀 文化庁



能面 笑尉
Noh Mask: Waraiji
室町時代・15～16世紀 文化庁



能面 万媚
Noh Mask: Manbi
「観世大夫／滋章（花押）」朱漆銘 江戸時代・17～18世紀 文化庁



万媚

面裏には「観世大夫／滋章（花押）」の銘があります。滋章は第十三代の観世大夫、重記（一七一六年没）のことです。重記が大夫になったのは貞享三年（一六八六）。第十二代観世大夫重賢は宝生大夫良重の弟です。